アベイヤ司教を迎え「平和への祈り」を実施

カトリック教会として全国的に「平和旬間」に取り組む中、手取教会では「平和への祈り」を企画し、8月10日（土）午後、聖堂内と聖堂前広場で展開した。この日から福岡教区長のアベイヤ司教を迎え、通常午後開催の8月度信徒役員会を10時15分から行い、12時からはアベイヤ司教との昼食懇談会を開催した。弁当を食べながら、信徒役員一人一人が自己紹介を行い、アベイヤ司教は「福岡教区100周年」に向けた強い思いを話された。3年かけての長距離走だが、1年目は「互いに支え合う『交わりの教会となる』」ことに取り組んでもらいたい…など丁寧な説明があった。

アベイヤ司教のお話から

・福岡に来て5年。教区内の全ての教会、島の教会まで回った。それぞれの教会には特徴があり良さがあり、それぞれの組織が宣教を果たしている。皆同じかと言うとそうではない。特徴があり地域の条件・伝統を活かしている。

・福岡教区100周年の2027年まで三年かけて信仰を深める機会になればと思う。今年は特に、宣教司牧方針の第二の柱「互いに支え合う『交わりの教会』になる」ということを心に留め、具体的な取り組みを各自、各小教区、各地区で考えて欲しい。

・いろいろな理由でミサに来る事ができない方がいる。教会から遠ざかっている。きっかけを作ることが大事。12月から聖年が始まる。信仰を深めていくために教会共同体として良い機会を作るように。

・「平和旬間」は社会とのつながりの中で行動を起こし、平和の祈りが叫びとなって欲しい。

・司祭が少なくなっている。皆で話し合ってやっていくことが大事。役割を認め合って目的を意識する必要がある。シノダリティ（共に歩む）のためにも子どもたちとともに歩む教会学校は大事。各地区での子どもたちのキャンプの企画は嬉しい。いろいろな人の協力で教会を支え合うことが大事。足を引っ張り合う事は良くない。〝私にはできない〟ではなく進んで出来ることを探し、共に歩んで欲しい。

・11月に青年大会を開催し韓国からも来られます。テーマは「やってみよう よ」。小倉・久留米・大名町はいい場所にあり、外向きの活動を行っている。手取教会は熊本市の便利なところにあって活動の拠点になっている。

・4月にアド・リミナ（司教団聖座訪問）で日本の司教17人がバチカンを訪問した。フランシスコ教皇が日本の神学生数を聞かれ大塚司教がやや不安気に「20数名です」と答えると、意外なことに「神学生が沢山いますね、イタリアのある教区では信徒数は日本の何十倍もいるのに、神学生がいない教区もある」と言われた。ローマでは一司教が50万人の信徒を抱えている。

・日本の司教団として環境問題への取り組みを報告したことは極めて良かった。社会との接点で環境を極めていくことで命の大切さを知る。科学的分析、命に対するキリスト教の考え方（第四奉献文「死に身をゆだね、死者のうちから復活して死を滅ぼし、いのちを新しくしてください」）。わたしたちが自分に生きるのではなく、わたしたちのために死んで復活されたキリストに生きるために…）、これからのエコロジカル教育が大事…など。

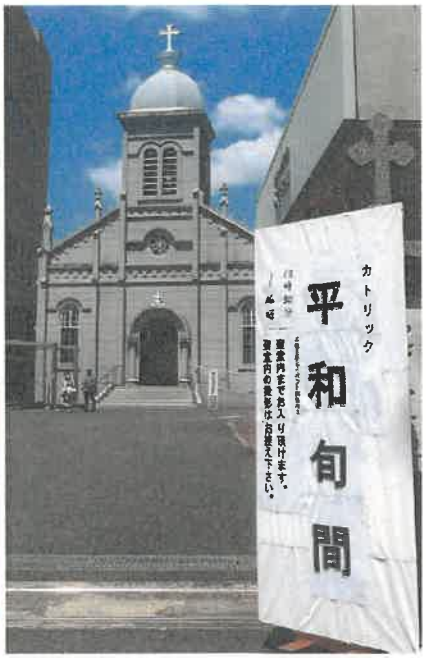
聖堂では「平和への祈り」を

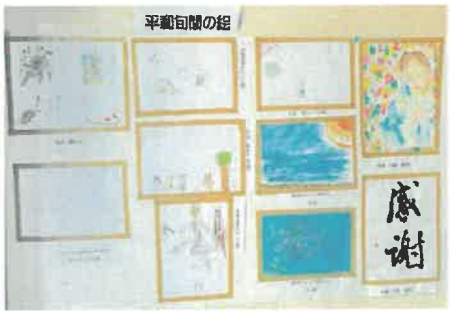
熊本市の中心市街地に位置する開かれた教会として「今こそ平和を祈りましょう」と、街を歩く方々に声をかけ、午後一時半から聖堂で、聖歌隊、ゴスペル、フルート演奏、ギター演奏、弦楽四重奏を四時まで行った。アベイヤ司教様は、信徒だけでなく一般市民を巻き込んだ平和へのメッセージ・俳句・短歌などを貼り付けた大型パネルをご覧になってから、聖堂で聖歌隊の歌を聞かれた。

聖堂内では、信徒会長の挨拶に始まり、まず聖歌隊が聖歌を披露。続いて後藤素子さんをリーダーとするゴスペルチームが祭壇前に並び、アメリカの第二の国歌ともいわれるアメージング・グレイスなど平和への祈りに相応しい歌曲を踊りながら披露された。次に、フルート合奏とギター伴奏による祈りの語り、最後は弦楽四重奏…。合間にはCDによるミサ曲を流した。手取の信徒だけでなく、通りかかった一般の方など最大時50～80人が共に祈りに参加した。

18時からは「年間19主日」のミサをアベイヤ司教、櫻井神父、申神父合同で行い、司教様は説教と派遣の祈りの後に「福岡教区100周年の歴史とこれから」について〝感謝・情熱・希望〟をもって取り組むよう強調された。ミサ前には内坪井修道院を訪問しショファイユの幼きイエズス修道会のシスター方と懇談、福岡教区のすべての教会、佐賀の小島の教会まで出向いたことなどを話された。

街行く人に「平和への祈り」への参加を呼び掛けた





子どもたちの作品

「平和への祈り」開始挨拶

ゴスペルチーム

フルート合奏

派遣の祝福の前に「福岡教区100周年」への取り組みを訴えられた

弦楽四重奏